

WEB連載 Entertainment・Essay

木村奈保子の音のまにまに

Writen By NAHOK KIMURA

ヒロイックな女たち

木村奈保子の音のまにまに | 第5号

今回は、映画を通じて、音楽を通じて、どのような社会の変化、進歩が見られるのか？映画雑誌「スクリーン」でも発表した私の【2019, 映画ベスト10】は以下の通り。

1. シェイクスピア・ウォーター (クリアーチャー)
2. デトロイト (黒人差別)
3. スリー・ビルボード (女性アトロー)
4. フロニー・ビスタ・ソサエティ・クラブ・オーディオ (音楽)
5. ウェンズドン・チャペル・ソサエティから世界を救った男 (ユダヤ歴史)
6. エリック・クラプトン (音楽)
7. 赤い夜 (音楽、ゲイ)
8. 妻の命がけで僕を呼んで (グレイ)
9. 1812 恋の嵐 (音楽、政治)
10. オーンヤンズ (女性アトロー)

音楽映画とマイノリティーの人権を問う映画 (女性、黒人、ユダヤ、ゲイ、クリアーチャー) のジャンルが中心。これは、私の好きなジャンルというだけでなく、社会的な傾向であり、映画は決して娯楽のためだけではないことを表している。

まず、作風は別として、「オーンヤンズ」は、女性映画として、フェミニズム的に気になる。男性映画のディレクションだったものも、オール女性監督が及ぶところに意味があるのだ。娯楽大作としては、キャスティングにまず、米国の輝ける女優、サンドラ・ブロックを主演に置いた。彼女の若さの輝きをサポートするのが、私の敬愛するクイーン女優、ケイト・ブランシェット。同じく曲者、ヘレン・ボナム・カーターと続く。ここまではいい。続いて、かわいい子ちゃん養育のアン・ハルヴェイから、若手は新進女優が強い、キャラもちょっと弱い。せっかくの女優大会に、迫力不足なのだ。どうして、格闘女優を入れないのか？

女優シリーズでは、ジョージ・クルーニーを中心にブラザー・マット・デイモン、アンディ・ガルシア、ケイシー・アフレックと主演級が揃うのに、女優大会ではなぜ呢々？ハリウッドなる迫力女優は多くいるのに、キャスティングの薄さにつくられたのは、男性ものとの比較で、私の今の期待と競争意識が高すぎるからだろうか？せめて、同等レベルのキャスティングでスタートさせてほしいのだが、富麗な期待もあるだろう。女性映画だからとキャラを度外視したくないある女優たちがキャラダウンしてでも集結してほしい。もしして、サンドラが主演だから、褒めたい。決して失敬ではないのだが、今後ある女優たちが支配してきた世界を女優たち中心で成立するところを大胆に見せてほしい。

「セックス・アンド・ザ・シティ」は女優たちが揃うも、しゃべりファッションと恋の女性向けラブロマ、女性たちだけで楽しむ心算を越えない。どうして、女たちが集まるも、女だけのまちまちした世界に入り込むのだろうか？私にはわからない。

これまで、男たちだけが表現してきた大胆なアクション、ストイックな感情、冷徹なバイオレンス、お茶目なユーモア、熱い友情など……映画の中だからこそ、女優たちも同じレベルで見せられるはずだ。まして、男性ヒットアクション映画の同シリーズとなる、フランス・マドマンドやミシェル・ヨーなど、演技派と格闘技派のベテラン女優を起して、バキ(キ)にスピード感を見せてほしい。そんな意味で、世紀女優、サンドラやボナム、ハルヴェイをキャスティングしたところから、またもや女性としての遅れをとった気がして、私は悔しい。

女性ならではの、という言い訳はもっと後でいい。男たちがやることは、いまや女も全部やれまう。年齢も、金ハリウッド女優をあげて次から次へとこなしている、女優の地位はもっと上がるだろう。アメリカの女優は、そこそこだけ、女が通る、という方向で楽々進む道があるのだから、男性主人公にバキ(キ)を押しをせしめたり、支配的になったりするだけだから、本気で、女たちの自立した力を生かすのが、先決と思う。

男ばかりのグループをも女性にしてみる映画では、あの「ロスト(スターズ) シリーズ、リポート版 (2016) - 女性主人公」までには至らないが、コメディエンスの迫力が美人女優の存在感より明確だ。日本では何の話題も渡り難い、最近などがキャスティングされ、なかなかの盛り上がりを見せた。

一方、TVシリーズ「ハウス・オブ・カード 野望の頂峰」では、ケビン・スペイシーが国民のことをかき回すも、悪徳大統領の本音と政府の裏面を描き出す。悪徳男を演じるスペイシーの上手さには何度も驚かされた。最終シリーズを前に、美少女のセクハラ問題などで騒動が決定し、その分、ファースト・レディ役のロビン・ライトが最終シーズンで、まんまと大統領役に躍り出るという展開。女が権力を持つって怖いのは悪いけどチャンスなのだが、残念ながら本作のロビンは、不倫をすまわ、夫の権力を利用する、正義感もない、のでしやべり悪女。まあ、大統領とファースト・レディが、悪徳コンビでいかに現代政治を苦しめる、女性、ロビン・ライトは、この作品で「自分もスペイシーと同じキャラを」と求めた。悪女。

かなりいい女優だが、スペイシーに成り代わるだけの魅力と実力を持っているのだろうか。男性と同じレベルの権力を至る女性大統領が、ヒロイックな女性像を持った理想的な女性なら両手をあげて喜ぶのだが、逆に、男 (夫) を踏み台に、社会的野心を果した女性のタイプだとしたら、これほど恐ろしいものはない。

現実の世界でも、男性社会を踏み台にするサクセス妻も少なくないので、女性を、女性をとりまくるに賢くフェミニズム思想を身につければならない、黒幕ことがある。しかし残念ながら、その種の女性のタイプに限って男性は警戒せず、持ちあけてしまう傾向にあるから、未来が怖い。

その点、トランプ大統領のメラニア夫人やオバマ元大統領のミシェル夫人は、よけいな野心はないように見えるが、クリントン元大統領のヒラリー夫人は、実際に大統領候補までなっから、原作のモデルだと噂されるのも無理はない。

そういえば、悪妻をしてニュースになる男のそばにいる妻に対して、女性は同じ女性として、同情心を持ちやすい。その作品のように、似たもの夫婦のカップルはいるはずで、共犯関係も決して少なくはないはず。女性の権利を認めるから、男の悪い部分を引き継ぐ女は、筋道なくや放蕩になる可能性がある。自分だけのうかつではないから、悪い男より、容赦ないかもしれないのだ。ある国の首相夫婦も、遠くから、そんなイメージがある。そういえばこの夫人は、本作のロビン・ライトのヘアスタイルと同じである。

とモカ、男は力があるも性的なキャンダルに巻き込まれやすい。そこで妻は、チャンスが通ってくる。本作では最終シリーズで、ついに悪徳政治家の権力を握る手にするバターン。したたかな悪人悪妻を引き継ぐ悪妻役、ロビン・ライトの気遣いと演技力は、並々ならぬものがある。何より、主役の悪妻に成り代わる女優のキャラは、どんな人間等に向かっているのかわからない。

さて、輝く女優がサンドラ・ブロックなら、真に輝いた演技派が、フランス・マドマンド、ケイト・ブランシェットと並ぶ、私のリスベクト女優の最優等生で、「ファゴ」に続くアカデミー主演女優賞を獲得した「スリー・ビルボード」も見事である。

娘がレイプされた母親が、ちゃんと捜査をやらない警察に意向かうというだけの設定で、物語は始まる。彼女の願いは、レイプ犯を探し出して、自分で始末すること。つまり、これまでなら、娘のレイプ犯を自ら探し出さなければならない、父親の仕事だった。警察がやらなくなるやがる、と夜の帳を繰り返すチャールズ・ブロンソンか？

人間差別主義者や、敵対する男たちとがみあふながら、いかなる方向に向かうのか？

マドマンドが、真面目でもおぼちゃんでもなく、女性にありがちなものをすべて排除したストイックなベテラン女優だ。そのヒロイックさだけ見れば、演技が深いので、B級にならず、アカデミックでさえある。そう、こんなヒロイン像が、あるいは女優が、実力を持ってどんどん登場すれば、男優に成り代わる主演映画として成立する。

女ならではの、女しか出せない強い女性像、フェミニズム感を超えて、男女共有感のあるヒロイン像に向かうことができる、という試みの強さ。社会に出る女性には、いつでも男性の役回りになり代わる準備ができていなければならない。と私はずっと思ってきた。

今後、セクハラやレイプのMe Too 運動で、才能ある女性たちが社会から落ちこぼれていくかもしれない。そんなときに、ロビン・ライトやマドマンドのように、待ってました。の準備が必要だ。私は、アンスタットでいい。そこまで責任を持ちたくない、という女性も多く見てきたが、私が知る限り、そういう謙遜な女性ほど才能があった。皮肉にも、謙遜さのない人のほうがやる気満々で、チャンスを探っていくことも例外ではない。

一方、「アトロー(スター)編」 (2018年版) は、スター歌手から見出され、なかなか自分の才能を認めることができない女性歌手の成長物語。いわゆる、粗い道を踏みぬけるタイプではない。美人ではなく、謙虚で実力のある新人歌手という後どころを力加が満ちる。やがて、新人歌手が周囲にも認められ、ステップアップしていく一方で、スター歌手はアル中が悪化し……。新人歌手がベテラン歌手の手ほどきを受けて、やがて立場が逆転する話。

何度モリバイバル化されている映画だが、師匠と弟子、男と女の関係をベースに、女性に男性を乗り越えて、支える劇になる展開とも見える。

ただ、私の感覚では、「ハウス・オブ・カード」は、夫婦間から権力を奪っているし、「アトロー(スター)編」も、恋愛-夫婦関係からチャンスを得た女性だ。いつても、師匠と弟子関係を男女の関係で演じているのが気になる。男同士なら、そういうわけはないだろうか？

男性社会では、一流の立場の男性と関わることで、自分が優れるのは圧倒的事実。そうすると、セクハラを受け入れず、自ら女の武器を使わず、は当然としても、妻や愛人の立場もない女性は、やはりチャンスを探みにくいではなからうか？

男女関係係者に、天下を取る女性が私は好きだ。愛と野心は別のものがつきりする。そのために女は、ストイックなまでの訓練が必要だろう。

いつでも、男性の仕事になり代わる準備ができているのか、そんな劇のかけをしながら、仕事や趣味に打ち込めれば楽しい。

社会に出る女性には、いつでも男性の役回りになり代わる準備ができていなければならない。と私はずっと思ってきた。

今後、セクハラやレイプのMe Too 運動で、才能ある女性たちが社会から落ちこぼれていくかもしれない。そんなときに、ロビン・ライトやマドマンドのように、待ってました。の準備が必要だ。私は、アンスタットでいい。そこまで責任を持ちたくない、という女性も多く見てきたが、私が知る限り、そういう謙遜な女性ほど才能があった。皮肉にも、謙虚さのない人のほうがやる気満々で、チャンスを探っていくことも例外ではない。

一方、「アトロー(スター)編」 (2018年版) は、スター歌手から見出され、なかなか自分の才能を認めることができない女性歌手の成長物語。いわゆる、粗い道を踏みぬけるタイプではない。美人ではなく、謙虚で実力のある新人歌手という後どころを力加が満ちる。やがて、新人歌手が周囲にも認められ、ステップアップしていく一方で、スター歌手はアル中が悪化し……。新人歌手がベテラン歌手の手ほどきを受けて、やがて立場が逆転する話。

何度モリバイバル化されている映画だが、師匠と弟子、男と女の関係をベースに、女性に男性を乗り越えて、支える劇になる展開とも見える。

ただ、私の感覚では、「ハウス・オブ・カード」は、夫婦間から権力を奪っているし、「アトロー(スター)編」も、恋愛-夫婦関係からチャンスを得た女性だ。いつても、師匠と弟子関係を男女の関係で演じているのが気になる。男同士なら、そういうわけはないだろうか？

男性社会では、一流の立場の男性と関わることで、自分が優れるのは圧倒的事実。そうすると、セクハラを受け入れず、自ら女の武器を使わず、は当然としても、妻や愛人の立場もない女性は、やはりチャンスを探みにくいではなからうか？

男女関係係者に、天下を取る女性が私は好きだ。愛と野心は別のものがつきりする。そのために女は、ストイックなまでの訓練が必要だろう。

いつでも、男性の仕事になり代わる準備ができているのか、そんな劇のかけをしながら、仕事や趣味に打ち込めれば楽しい。

社会に出る女性には、いつでも男性の役回りになり代わる準備ができていなければならない。と私はずっと思ってきた。

今後、セクハラやレイプのMe Too 運動で、才能ある女性たちが社会から落ちこぼれていくかもしれない。そんなときに、ロビン・ライトやマドマンドのように、待ってました。の準備が必要だ。私は、アンスタットでいい。そこまで責任を持ちたくない、という女性も多く見てきたが、私が知る限り、そういう謙遜な女性ほど才能があった。皮肉にも、謙虚さのない人のほうがやる気満々で、チャンスを探っていくことも例外ではない。

一方、「アトロー(スター)編」 (2018年版) は、スター歌手から見出され、なかなか自分の才能を認めることができない女性歌手の成長物語。いわゆる、粗い道を踏みぬけるタイプではない。美人ではなく、謙虚で実力のある新人歌手という後どころを力加が満ちる。やがて、新人歌手が周囲にも認められ、ステップアップしていく一方で、スター歌手はアル中が悪化し……。新人歌手がベテラン歌手の手ほどきを受けて、やがて立場が逆転する話。

何度モリバイバル化されている映画だが、師匠と弟子、男と女の関係をベースに、女性に男性を乗り越えて、支える劇になる展開とも見える。

ただ、私の感覚では、「ハウス・オブ・カード」は、夫婦間から権力を奪っているし、「アトロー(スター)編」も、恋愛-夫婦関係からチャンスを得た女性だ。いつても、師匠と弟子関係を男女の関係で演じているのが気になる。男同士なら、そういうわけはないだろうか？

男性社会では、一流の立場の男性と関わることで、自分が優れるのは圧倒的事実。そうすると、セクハラを受け入れず、自ら女の武器を使わず、は当然としても、妻や愛人の立場もない女性は、やはりチャンスを探みにくいではなからうか？

男女関係係者に、天下を取る女性が私は好きだ。愛と野心は別のものがつきりする。そのために女は、ストイックなまでの訓練が必要だろう。

いつでも、男性の仕事になり代わる準備ができているのか、そんな劇のかけをしながら、仕事や趣味に打ち込めれば楽しい。

社会に出る女性には、いつでも男性の役回りになり代わる準備ができていなければならない。と私はずっと思ってきた。

今後、セクハラやレイプのMe Too 運動で、才能ある女性たちが社会から落ちこぼれていくかもしれない。そんなときに、ロビン・ライトやマドマンドのように、待ってました。の準備が必要だ。私は、アンスタットでいい。そこまで責任を持ちたくない、という女性も多く見てきたが、私が知る限り、そういう謙遜な女性ほど才能があった。皮肉にも、謙虚さのない人のほうがやる気満々で、チャンスを探っていくことも例外ではない。

一方、「アトロー(スター)編」 (2018年版) は、スター歌手から見出され、なかなか自分の才能を認めることができない女性歌手の成長物語。いわゆる、粗い道を踏みぬけるタイプではない。美人ではなく、謙虚で実力のある新人歌手という後どころを力加が満ちる。やがて、新人歌手が周囲にも認められ、ステップアップしていく一方で、スター歌手はアル中が悪化し……。新人歌手がベテラン歌手の手ほどきを受けて、やがて立場が逆転する話。

何度モリバイバル化されている映画だが、師匠と弟子、男と女の関係をベースに、女性に男性を乗り越えて、支える劇になる展開とも見える。

ただ、私の感覚では、「ハウス・オブ・カード」は、夫婦間から権力を奪っているし、「アトロー(スター)編」も、恋愛-夫婦関係からチャンスを得た女性だ。いつても、師匠と弟子関係を男女の関係で演じているのが気になる。男同士なら、そういうわけはないだろうか？

男性社会では、一流の立場の男性と関わることで、自分が優れるのは圧倒的事実。そうすると、セクハラを受け入れず、自ら女の武器を使わず、は当然としても、妻や愛人の立場もない女性は、やはりチャンスを探みにくいではなからうか？

男女関係係者に、天下を取る女性が私は好きだ。愛と野心は別のものがつきりする。そのために女は、ストイックなまでの訓練が必要だろう。

いつでも、男性の仕事になり代わる準備ができているのか、そんな劇のかけをしながら、仕事や趣味に打ち込めれば楽しい。

社会に出る女性には、いつでも男性の役回りになり代わる準備ができていなければならない。と私はずっと思ってきた。

今後、セクハラやレイプのMe Too 運動で、才能ある女性たちが社会から落ちこぼれていくかもしれない。そんなときに、ロビン・ライトやマドマンドのように、待ってました。の準備が必要だ。私は、アンスタットでいい。そこまで責任を持ちたくない、という女性も多く見てきたが、私が知る限り、そういう謙遜な女性ほど才能があった。皮肉にも、謙虚さのない人のほうがやる気満々で、チャンスを探っていくことも例外ではない。

一方、「アトロー(スター)編」 (2018年版) は、スター歌手から見出され、なかなか自分の才能を認めることができない女性歌手の成長物語。いわゆる、粗い道を踏みぬけるタイプではない。美人ではなく、謙虚で実力のある新人歌手という後どころを力加が満ちる。やがて、新人歌手が周囲にも認められ、ステップアップしていく一方で、スター歌手はアル中が悪化し……。新人歌手がベテラン歌手の手ほどきを受けて、やがて立場が逆転する話。

何度モリバイバル化されている映画だが、師匠と弟子、男と女の関係をベースに、女性に男性を乗り越えて、支える劇になる展開とも見える。

ただ、私の感覚では、「ハウス・オブ・カード」は、夫婦間から権力を奪っているし、「アトロー(スター)編」も、恋愛-夫婦関係からチャンスを得た女性だ。いつても、師匠と弟子関係を男女の関係で演じているのが気になる。男同士なら、そういうわけはないだろうか？

男性社会では、一流の立場の男性と関わることで、自分が優れるのは圧倒的事実。そうすると、セクハラを受け入れず、自ら女の武器を使わず、は当然としても、妻や愛人の立場もない女性は、やはりチャンスを探みにくいではなからうか？

THE FLUTE お知らせ
THE FLUTE vol.174
THE FLUTE | バックナンバー
FLUTE CLUB 入会・更新はこちら
フルート講座一覧

ENTRY 投稿・投稿
>>> THE FLUTE アンケート一覧へ

KAWAI Music School
レッスル新着
Blind guide
メロディと音階
自然な音階を学ぶ
KAWAI Music School

HORG
クラシック音楽の新たな魅力を体験してみませんか？
演出 大塚 大

オーディオを聴く
オーディオを聴く | 音量 | 941
聴いてのりかき | 村上春樹 | 493
赤い夜 | 山田孝之 | 549
若者たち | 山田孝之 | 381
青春手帳 | Dreamcatcher | 404
手をあきらめて | 岡村寧子 | 551
恋はあきらめて | Lamour est Beau | 403
ロビンソン | スベツ | 600
恋の運命に勝つ | Can't Take My E... | 552
PIECE OF MY WISH | 今井美穂 | 447
Hello Again - 昔からある場所 - | M... | 800
Can You Celebrate? | 安室奈美恵 | 1.9K
負けて | ZARD | 751
空(空) | SHAP | 559

フルートデュオ アラ・カルト
楽譜の特殊奏法を解説!
The Flute Trio フルード
フルートデュオアラカルト

The Flute ザ・フルード
フルートオンライン連載
『フルートデュオアラカルト』
第10回 楽譜の特殊奏法を解説!
... もっと見る

LINE 無料フルード
フルードデュオアラカルト
フルードデュオアラカルト
フルードデュオアラカルト

第6回インタビュー「上野由紀と松岡」
上野由紀のフルードデュオアラカルト

JAZZの店
第1回インタビュー「上野由紀と松岡」

フルードデュオアラカルト
フルードデュオアラカルト
フルードデュオアラカルト

PRAY FOR KYOANI 「いねん」を聴んで
フルードデュオアラカルト

第3回インタビュー「上野由紀と松岡」
上野由紀のフルードデュオアラカルト

フルードデュオアラカルト
フルードデュオアラカルト
フルードデュオアラカルト

フルードデュオアラカルト
フルードデュオアラカルト
フルードデュオアラカルト